

リスクマネジメントと保険の力量に対する測定尺度について

韓国 西原大学 経営学部

南 相旭

I. 問題提起

世界的に不確実性がますます高まり、不測の事故も絶えず発生している。このような不安定さの中で何よりも重要なことは、潜んでいるさまざまなリスクにどうすれば能動的、かつ、賢明に対応できるかである。そして、その対応の1つがリスクマネジメントと保険(Risk Management & Insurance, 以下 RMI)の活用である。

筆者が研究対象とするRMIの力量とは、RMIを活用して明示的な成果を出すことのできる個人の内的能力といえる。この明示的な成果とは、RMIに対する態度と知識、そして活用技術をベースに、生活まわりに潜んでいるさまざまなリスクに効果的に対処・対応することである。

上記力量を高めることは究極的には個人の生活の質の向上だけでなく、社会の安定にも資する。ところで、これまで世間の耳目を集めた大惨事や社会的に怒りを引き起こす事件・事故が発生した時、いつか、RMIの重要性や必要性が取りざたされたが、すぐに忘れられるのが常であった。つまり、問題はRMIの重要性に対する社会的忘却にある。このRMIの重要性に対する社会的忘却は、程度の差があるが、全世界がまったく同じだ。いずれの国家、社会においても、いまだRMIに対する認識は低いといえる。

今こそ、個々人の安全と社会の安定のためにRMIに対する認識とRMIの力量を高めていくことが必要であり、そのためには、上述した社会的忘却症の治療方法を見つけなければならない。

そのためには、まずRMIの力量向上の可能性の有無から議論を始めなければならない。そのスタートラインは人々の力量水準を測定することである。人々のRMIの力量がどの程度なのかを明確に診断してこそ、はじめて、彼らに適合した処方ができるからである。換言すれば、正確な診断がなされてこそ、何をどのように教育し、また政策的にどの部分の改善が必要なのかを知ることができる。しかし、これまで韓国だけでなく、海外でもRMIの力量に関する研究は不十分な状態である。特に、RMIに焦点を当て、その力量の測定尺度や評価方法の研究は不足している。したがって、RMIの力量の概念と評価に必要な論拠を整理し、RMIの力量の構成要

素と測定尺度を開発する必要がある。

II. RMIの力量の構成要素と測定尺度 開発

筆者はこれを機に、次のような方法でデルファイ調査技法(Delphi survey)を通じてRMIの力量を測定できる尺度を開発した。デルファイパネルは、韓国保険学会と韓国リスク管理学会所属の保険学者とリスク管理学者で構成され、パネル構成員の意見を収集した。RMIの力量を構成する要素と下部領域に対する彼ら専門家の意見が合意されたかどうかは、四分位数範囲(interquartile range)と変動係数(variance coefficient)を基準に判定した。

Vonder Gracht, Darkow(2012)によると、5点リカード尺度の適用時の四分位数が1またはそれ以下であれば、パネル間で合意がなされたと評価できる。なお、English, Kernan(1976)によれば、変動係数が0.5以下であれば合意したと評価することができる。これらの基準に合わせてパネル間のコンセンサスの有無を判定した結果、71個のRMIの力量を構成する要素と下部領域を抽出した。そして、これを基に設計されたRMIの力量を測定する項目を一般人を対象に予備調査を経て測定項目の妥当性を検定し、最終的に69項の測定問題(態度 19項、知識 25項、技術 25項)を選定した。

III. 意見と提案

RMIの力量に対する測定尺度は、国民のRMIの力量水準を計量的に評価し、時間の経過によってRMIの力量が蓄積されていくか、後退するかを評価でき、対応策を模索する上で基礎になるであろう。ただし、本報告はRMIの力量測定尺度の枠組みを提案したもので、さらなる後続研究が必要である。その1つは、測定項目の縮小と簡潔性の確保である。もう1つは、国際比較である。RMIの力量の尺度と測定項目をグローバル化し、国家間の比較評価を行うことができるなら、国家間のRMI活用の力量差をも比較が可能となる。これは将来的に意義ある研究課題となるだろう。